薬の豆知識

ｖｏｌ．６　漢方医学

漢方薬を日頃から使っている方、臨時的に使ったことがある方、興味はあるけど接点がない方・・・漢方薬との関わりは様々かと思います。今回はこの「漢方薬」について、どのように診断され薬が選ばれているかお話します。

まずは西洋薬と漢方薬の比較ですが、西洋薬では作用が促進・抑制の二者択一であるのに対し、漢方薬は異常なレベルの生体機能を、正常レベルに調整する働きを持っています。漢方薬は様々な生薬をブレンドしたものであり、その絶妙な構成によって正常状態に戻すことができるのです。

また西洋医学では、出ている症状と血液検査による数値や画像などを重視して診断されますが、漢方医学では血液データはとらずに、漢方医学独特の診断方法を用います。

その方法は・・・①患者様からお話を伺う「問診」
②その人の顔色や表情、目に力が入っているか、舌などをみる「望診」
③話し方や咳などを耳で聞き、また臭いをかぐ「聞診」
④脈をとったり、お腹をみる「切診」

これを漢方「四診」と言いますが、なかでもお腹をみることを「腹診」と言い、重要な診断の一つとなります。

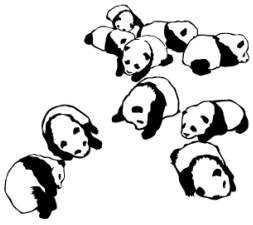
この四診を行い、患者様の「証」を見分け、証に従った漢方薬を処方します。「証」とは、「虚実」「陰陽」「表裏」「寒熱」に分けられ、患者様の病因とそれに対する反応を含む、患者様の全体像を表すものになります。証は患者様の素因や体質、生理機能の状態を表すものでもあるため、証を間違えたり、証とは異なる薬を扱うと、効果が減弱するばかりでなく、副作用の原因になることもあるのです。

また漢方医学の診断方法として、「気・血・水」という考え方もあります。これは聞いたことがある言葉かも知れませんね。「気」は体内に流れる生命エネルギー、「血」は血液、「水」は血液以外の体液を指し、この３つがうまく循環していれば健康であり、どれかが崩れるとさまざまな病気が引き起こるというものです。

中国では人間の内臓を表す言葉として「五臓六腑」などと言いますが、漢方医学でも「肝心脾肺腎」を「五臓」として、肝心脾肺腎のどこが失調しているかを判断します。

最後に、疾患のステージ(病期)を「六病位」として分類します。一つの疾患において、病態が流動的に変化していくという考え方で、「三陰三陽の六経」(６つの病期)として分類します。

以上、「四診」による「証」の把握、「気・血・水」、「五臓」、「六病位」を用いた診断により、患者様のその時の症状に合った漢方薬を選択します。非常に複雑で判断が難しい領域ですが、正しい診断によってそれぞれにぴったりの漢方薬に出会えると思います。そのためにも、ご自身のその時の症状をしっかりと把握しておく必要がありますね。



クリオネ南４条薬局